LEVOLANT
ル・ボラン2月号
2018

カバタ屋
よろず乗り物研究所
その33

今月の研究テーマ

神様の土地にクラシックカーが大集合。そのワケは？の巻

谷保天満宮旧車祭

連載「カバタ屋」は、クルマ大好き、乗り物大好きな下野康史がいま気になる「おもしろ乗り物」にまつわるアレやコレを独自の視点でいろいろ探求してみよう！ という企画。今回は、日本のみならず世界のクラシックカーが集まる旧車イベント、谷保天満宮旧車祭を密着取材。何でもここは交通安全祈願発祥の地でもあるという、そのワケとは!?

リポート｜下野康史｜Y.Kabata　フォト｜柏田芳敬｜Y.Kashiwada

明治のセレブによる日本初のドライブツアー

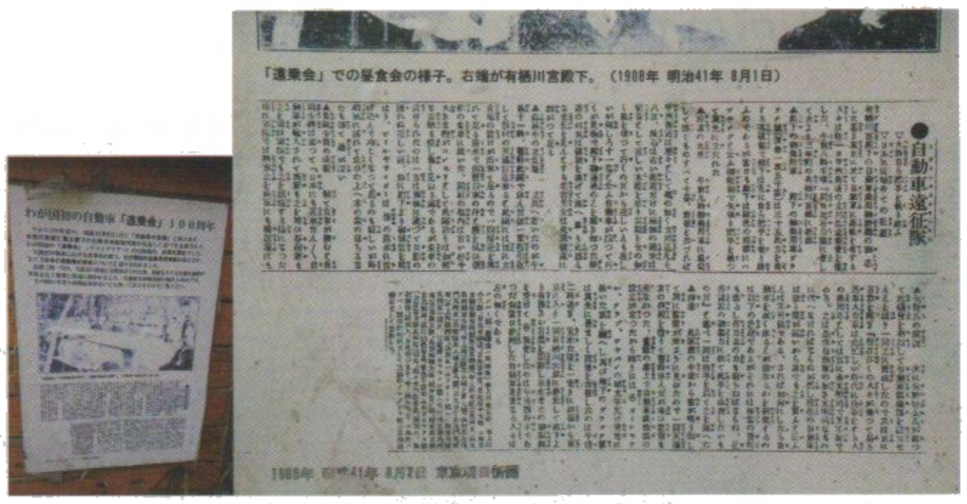
毎年12月初め、東京都国立市の谷保天満宮に古いクルマが集まってくる。オートモビルクラブジャパン（ACJ）が主催する「谷保天満宮旧車祭」だ。初詣や学業成就で人気の高い神様の土地での旧車フェスティバル。そこには世紀を超えた深いワケがある。ある意味、この神社が日本の自動車文化発祥の地だからだ。

いまから110年前の明治41年8月2日、日比谷公園を出発した11台のクルマが車列を組んでここへやってきた。まだ日本に自動車メーカーがなかったどころか、東京に20台ほどしか自動車の登録がなかった時代、「遠乗會」と称するそのイベントは、いわば日本初のドライブツアーだった。

集まったクルマは、会の中心人物、有栖川宮威仁親王のダラック（英国）を始め、フォード、ハンバー、マセソンといった米国車、そしてメルセデス、フィアット、さらには3台のタクリー号がいた。ガタクリガタクリ走ることから名づけられたそのクルマは、長い英国留学の影響から「自動車の宮様」と呼ばれていた威仁親王がつくらせたもので、殿下のダラックをメンテナンスしていた吉田眞太郎が製作したという以外、詳細は不明だが、この吉田式タクリー号こそが、初の国産ガソリン車と考えられる。

参加メンバーもすごかった。陸軍少将の長岡外史。外務、大蔵など数々の大臣を歴任した井上馨。ホテルオークラをつくった大倉喜七郎。三越百貨店創業者の日比翁助。現在のTOTOの礎を築いた森村開作などなど、官民にわたるセレブ中のセレブである。

到着後、神社の梅林で昼食会が開かれた。「陸軍は、今後、砲車や輸送車として自動車を使っていきたいと考えている。日本のクルマづくりはまだけっして盛んとはいえないが、今日こうして、10台あまりのクルマで遠乗會ができたことは、まことに記念すべきことである」。長岡少将がそう挨拶した。「馬車や人力車はもはや非文明的で不便である。それに代わる自動車をいかに安くつくることができるか、これからはその研究が急務である」。そう語ったのは、第一生命保険を設立した矢野恒太だった。さらに氏はこの機会を記念して、自動車倶楽部（オートモビルクラブジャパン）の設立を提案し、一同の賛成を得ている。



遠乗會の模様を詳しく伝えた東京朝日新聞の記事。フィアットは「フヒヤツト」と表記。すべての車名の最後に號（号）と付けられているところが時代を物語る。

◀谷保天満宮の梅林に建つ記念碑。長年、神社側も皇族台臨の目的が何であったのか知らなかった。

参加車両とオーナーは、もれなくお祓いを受けられる。

▼旧車祭のマスコットとしてつくられたタクリー号。1930年オースチン7がベースなので、本物より小柄でカタチも違う。より忠実に再現した模型はトヨタ博物館に展示されている。

神社の梅林に建つ古い記念碑のミステリー

だが残念ながら、このときの熱い気運は、クルマ好きの威仁親王が5年後（大正2年）に亡くなることもあり、断線してしまう。そのため、遠乗會の事実は長いこと日の目を見ることがなかった。

しかし、ときは変わって、21世紀。古い文献を調べていた国立市の高校の先生が、明治41年8月2日付けの新聞記事を見つける。「自動車遠征隊」と題された東京朝日新聞の写真付き長文リポートが、まさに遠乗會のものだった。

一方、谷保天満宮の梅林の片隅には「有栖川宮威仁親王殿下台臨記念」と刻された記念碑が昔から建っていた。ただ、目的については神社の職員のあいだでも「陸軍の演習のため」とだけしか伝えられてこなかった。記念碑の裏側に刻まれた日付は、記事の前日。ここで遠乗會と谷保天満宮がつながった。

その後、遠乗會から100周年にあたる2008年に初のクラシックカーイベントが開かれ、以後、